

特集 毛沢東 人・思想・革命

毛沢東体制は解体する

内政・外交の両面に転機迎える中国

中 嶋 嶺 雄

1 解き放たれた死

誰もそれぞれの視野において予測したはずの毛沢東の死がついに現実のものとなった。毛沢東の訃を伝えるニュースが世界を駆けめぐり、さまざまな反響があわただしく報ぜられて一陣の風波がおさまったとき、毛沢東の死そのものは、すでに十分に計量され、衝撃緩和の装置を伴ったものだったことに人は気がつく。その意味では、毛沢東の死は、いまようやく解き放たれたのであった。

だが、その解き放たれた死によって、安堵を覚える人はいないはずである。中国の激しい対立状況のなかで毛沢東の死を「これは中国の将来にとって、いいことだ」と、率直にいえる」（スミルノフ・ノーボスチ通信社政治評議員、九月九

日）とさえ言いきれぬソ連の人びとも、毛沢東の死を「暴虐の極権主義者の斃命」（台湾の中央通訊社台北電、九月九日）として報じた台湾政權の側も、そして、つい先日、天安門事件に際して「中国は過ぎし中国にあらず、人民も愚かさ

きわまれるものにあらず、秦始皇の封建社会は再びかえらず……」といった詩をほりだした、中国内部の「毛主席に反対して反革命的破壊活動をおこなう悪人たち」（『人民日報』四月八日）でさえも、毛沢東なき中国の将来に対する巨大な不可測性のゆえに、いま、苛立たしい不安にとらわれざるを得ないであろう。周恩

の初頭以来激動が相次いだのちの毛主席の死であるだけに、こうした重大事件の連続が中国民衆に与えるであろう心理的動揺についてはいふまでもない。それほどまでに、毛沢東の生命は、中国に残されたあまりにも数多くの問題と乖離して、いま、自己完結したのである。

もっとも、人は、すでに華国録を中心とする後継指導体制が形成されているとみなすかもしれない。また、すでに毛沢東は政治の実務を久しく離れていたのだから、その死がもたらす損失も減価されるというかもしれない。あるいは、私自身もこれまでしばしば指摘してきたように、周恩來の死がもたらした具体的な政治的損失に比して毛沢東の死は、その象徴的な意味の大ききのゆえに、むしろ当面は「政治的な凝集力」としてこそ作用するかもしれない。にもかかわらず、

毛沢東の存在は、あらゆる意味で中国の内政と外交の流れを結局は一つの漕に流し込んできた「心理的強制力」としてこそ絶大な意味をもってきただけに、毛沢東の不在は、多くの問題に直面しなければならぬ中国の内政と外交の将来を複雑に流動化させざるを得ないであろう。

毛沢東主席の死去に際して発表された中国共産党中央委員会・中華人民共和国全国人民代表大会常務委員会、中華人民共和国國務院、中国共産党中央軍事委員会の「全党全军全国各族人民に告ぐる書」（以下「告ぐる書」と略す）は、毛沢東の革命的功績として、とくに次の三点を強調していた。すなわち、①新民主主義革命の時期に、「わが国が武力で政權を奪取するには、農村根拠地を樹立し、農村によって都市を包圍し、最後に都市を奪取する道を歩むしかなく、別の

道を歩んではならないことを指摘した」こと、②社会主義革命の時期には、「マルクス主義の発展史上最初に、生産手段所有制の社会主義的改造が基本的に達成された後にも、なお階級と階級闘争が存在することを明確に提起した。そしてブルジョア階級はほかでもなく共産党内部にいるという科学的論断を下し、プロレタリア階級独裁下での継続革命の偉大な理論を提起し、社会主義の全歴史的段階における党の基本路線を制定した」こと、③「彼はプロレタリア革命家の雄大な気迫で国際共産主義運動中にソ連修正主義裏切り者集団を中心とする現代修正主義を批判する偉大な闘争を起し、世界のプロレタリア革命事業と各国人民の反帝・反霸権主義の事業の盛んな発展を促進し、人類の歴史の前進を推進した」こと——である。それゆえに「毛沢東主席は、現代のもっとも偉大なマルクス主義者である」と「告ぐる書」は述べている。

だが、このように的確な毛沢東の業績の位置づけにもかかわらず、右の三点のうちでは、その第一点のみが歴史的な評価として確定しているだけであって、社会主義革命の時期の第二点、第三点の問題、すなわち、社会主義社会での階級闘争論と継続革命論および現代修正主義批判と反霸権主義は、その論点自体に対し、前者については中国社会内部からも大いに異論があったし（鄧小平前副総理は「階級闘争を毎日しゃべってなぜいられるか」とさえ語ったという。〈黎澍〉「マ

ルクス主義を全面的に裏切った鄧小平」『紅旗』一九七六年第五号参照）、後者についてはいままさに国際的係争のただなかにあるのであって、歴史的な決着はいささかもついていないのである。つまり、毛沢東が提起した挑戦に対しては、今日の中国社会ないしは現代世界がまだ十分な決着を与えていないのであって、これらの争点はなお生々しい現実性を帯びて毛沢東以後の中国を理論的にも実態的にも揺り動かしてゆかざるを得ないのである。半面、毛沢東の死が解き放されたその瞬間から、中国の権力構造の不可避的な再編は開始される。

2 権力構造の再編とリーダーシップ

いまここで毛沢東政治の軌跡をたどることはしないが、一口に毛沢東政治の特質を抽出するならば、それは「党内闘争の大衆運動化」としてとらえることができる。文化大革命は、このような毛沢東政治の極限形態であったが、その理念は揺るぎなく定着したといえず、脱文革、林彪翼変、「批林批孔」運動、「水滸伝」批判、「走資派」の再出現、天安門事件へと相次いだ激動の果てに、これら一連の政治的出来事の総決算（中国では「算帳」〈勘定を清算する〉という言葉が使われている）を見ないまま、毛沢東はいまついに逝ってしまった。しかも、そこにはいわゆる後継者問題での相次ぐ挫折といわゆる文革派による家父長体制という負の遺産が残されたまま……。

このような状況のなかで、中国のリーダーシップの前途には、きわめて多くの問題が待ち受けている。もとより、毛沢東逝去直後の現時点においては、それらの問題を予測する確定的な手がかりは少ない。当面は、来る九月一八日に挙行政

れる葬儀（追悼式）がどのようなかたちで営まれるのか——誰が葬儀委員長に就任するのか、誰が弔辞を読むのか等々——が注目されねばなるまい。なぜなら、とくに葬祭の儀に敏感な中国人の意識構造において、誰がどのようなかたちで毛主席の死を葬送する主役になるのかは、きわめて重要な意味をもつであろうし、現に、過般の周恩来葬送の際（一月五日）には、全参加者を代表して鄧小平副総理（当時）がいわゆる「走資派」の立場からきわめて挑戦的な弔辞を読み、内外に周総理の後継者たることを誇示したがゆえに、そのことがもたらした危機感のなかで、文革派による鄧小平打倒が発動されたのであった（これらの点については、拙稿「天安門政変と『走資派』」『朝日アジアレビュー』一九七六年夏号参照）。それだけに前途は予測しがたいが、今日の政治秩序においては、党中央政治局常務委員として残る四人の最高リーダーシップ（華国鋒〈第一副主席〉、王洪文〈副主席〉、葉劍英〈同〉、張春橋

〈常務委員〉）のなかで、去る天安門事件以後、急遽、党中央第一副主席兼國務院総理となつた華国鋒が主役を演じて当然であろう。だとすれば、華国鋒はそのまま党主席の地位を襲い——つまり毛沢東の後継者となり——同時に國務院総理の地位も兼ねるのであるか。もしも、そのような地位が華国鋒に与えられるとすれば、党主席と國務院総理という、毛沢東も周恩来も任じ得なかつた前例のない地位に就くことになる。この点に関しては、そのような任倒的な地位を華国鋒一人に与え得るものではないという見方と、毛沢東という圧倒的な存在を継承するためには、その絶対的な重量不足を明白な地位的保障によって補填しなければならぬから、そのような異例の措置も可能だという見方があり得よう。だが、後者の場合においてさえ、毛沢東権力が保持していたような重量には欠けるのである。思えば、そのような重量ないしはカリスマ性は、単に毛沢東が中国革命と建国の指導者であったという経緯のみあるのではなく、「権力と道徳の融合」によってはじめてもたらされたものであり、それゆえにこそ毛沢東の存在自体が最後のには「心理的強制力」たり得たのであった。この点においても、毛沢東の死は、毛沢東体制の解体をもたらさざるを得ないのである。

そして、現行の憲法（七五年一月決定）によれば、国家権力（その最高権力としての全国人民代表大会）さえ、党の

指導下に置かれることとなったのであるから(新憲法「前文」および第二条、第一七条)、党規約(七三年八月決定)に基づき「党の一元化指導」の原則によって中国では「すべての権力が党主席に集中する」という状況を法制的には形成してしまっている。だが、制度的にこま

で強権化された権力構造は、やはりただひとり毛主席にのみ許容されるという「合意」のうえに、これらの制度が成ったことも否定し得ない。従って、他の指導者たちは、毛沢東のみに許容した強権を新任党主席に対しても制度的に保障すること自体にかなり抵抗を覚えるものと思われ、いずれ現行の第四期全人代体制および一〇全大会制の変更(つまり憲法と党規約の改定)を志向するであろうし、新任党主席ないしはそれを支える政治勢力は、現行権力システムの維持をはかるうとするであろう。かくして、毛沢東以後の権力構造の再編をめぐっては、不可避的な党内闘争を惹起せざるを得ない権力のシステムを今日の中国は内包しているのである。

このような客観的な現実のなかで、いわゆる集団指導体制がスムーズに機能してゆくであろうという展望はもちろくない。周恩来葬儀の場合と異なると、今回は葬儀委員長が決定されず、先の四人の政治局常務委員が列記されたことに示されるように、中国は当面、党主席を決定しないのかもしれないが、いずれにせよ、集団指導体制に関して第一の問題点

は、これまで社会主義諸国の権力がそのような集団指導体制によって安定もしくは持続した例が皆無に等しいことであり、この点はスターリン死後およびフルシチョフ失脚後のソ連の例を見ても明らかであろう。第二には、古来、中国の政治に独裁的指導者が出現しない例がなく、そのうえ合議制とか集団指導とかの近代的な統治のシステムそのものを中国の「政治文化」はそもそも受け入れにくいようにも思われる。歴史の前例からすれば、独裁的指導者を欠いたあと中国は、長期の混乱に悩んだのであった。このような前提に立つたとき、毛沢東以後の中国のリーダーシップは、いわゆる集団指導制への論理的な必然性と実態的な非適合性との矛盾のなかに揺れ動くのではなからうか。

この場合、当面の考慮に値することは、毛沢東以後の中国のリーダーシップがいわゆる文革派と実務派および両者の中間的な新実権派とも思われる政治勢力によって暫時担われてゆくであろうことである。毛沢東家長体制の支柱として江青夫人を軸にいわゆる上海グループを形成してきた文革派としては、王洪文、張春橋、江青、姚文元、汪東興らを挙げることができるのに対し、実務派のリーダーとしては葉劍英、李先念が政治局に残っているにすぎないが、このグループは周恩来亡き中国の政治状況のなかで、結局、鄧小平を代償にしてその潜在的な政治基盤を温存し得ていると思わ

れ、いわゆる「走資派」勢力(旧実権派を含む)の許された表象だともいえよう。この両極に対して華国鋒は勢力均衡的なバランスの位置にあるように思われるが、最近では呉德政治局員(全国人民代表大会常務委副委員長、北京市革命委主任)らも華国鋒体制を支え、文革派のなかからは張春橋がその政治的リアリズムによって強力なバランスとしてこれら新実権派に位置を変えつつあるようにも思われる。この点では、去る六月八日に党のある会議で華国鋒が江青らの左派を批判したとの未確認情報も、意外に重要な意味をもっているかもしれない。

そこで、このような政治の方向を見守っている軍の動向が重視されねばならないが、天安門事件当時は、江青、王洪文らの指導下にある首都工人民兵や各地の都市民兵が、汪東興率いる北京の中央警衛団、つまり八三四一部隊とともにク

ローズアップされたが、七月下旬の河北大地震以来、正規軍としての人民解放軍の存在が、その救援活動に果たした役割とともに前面に出ており、この点では、葉劍英、劉伯承(中央軍事委副主席)らの軍長老とともに、北京軍区司令として枢要のポストにある陳錫聯をはじめ、許世友(広州軍区司令)、李德生(瀋陽軍区司令)らの有力軍指導者がいずれも実務派ないしは新実権派を支持する立場に傾いているように思われる。陳錫聯、許世友、李德生という軍の有力者三人が実務派の重鎮、李先念と同郷の湖北省黃安県出身であるという事実も、一方で文革派の上海グループ生成の経緯と同様に、中国の政治的風土のなかでは単なる偶然として看過できないものを含んでいよう。こうした状況のなかで、いわゆる文革派がひたすら毛沢東継承権を主張しつづけるとしたら、中国内政の不協和音は一挙に増幅するであろう。

3 DEERMAOIZATION

一九五三年三月、スターリンが逝ったとき、ソ連の党と政府はスターリンの功績を最大限にたたえてその死を悼んだが、死後三年にして五六年二月のソ連共産党第二〇回大会でおこなわれた断絶的なスターリン批判を予測した者はなかった。それほどまでにスターリン神話は完壁だと思われたのである。今回、中国の党と政府は、同様に毛沢東の功績を最大限にたたえているけれども、毛沢東がスターリンの場合のように、いつの日か青天の霹靂のような批判にさらされるだろうと考える根拠は少ないように思われる。なぜなら、毛沢東の場合、毛沢東体制のもともどもつねに毛沢東政治への批判が明示的にも暗示的にも存在してきたし、第一、彭德懷、劉少奇、鄧小平らの党内闘争の敗北者はいず

れも毛沢東批判者でもあったのである。過般の天安門事件は毛沢東政治への批判の潮流が広範に潜在していることを改めて痛感せずにはおかなかった(この点については拙稿「底流に毛沢東政治への批判——天安門事件の背景」(本誌一九七六年四月一六日号)および同「再編成・天安門事件」(中央公論)一九七六年九月号)参照)。このような事実を顧みたとき、やがて中国は「毛沢東思想」を漸次より相対化して位置づけねばならぬ必要に迫られるのではなからうか。かつて、E・フロムは、非スターリン化過程のソ連社会におけるイデオロギーの意味と機能を論じながら、ソ連の内政と外交の流れを規定するのは、いまや「その社会的・政治的構造であり、もはやイデオロギーではない」(「人間の勝利を求めて」)と述べていたが、今日の中国がただちに当時のソ連と同じ段階に向かうとはいえないにしても、毛沢東の死は、その政治権力の絶対的かつ家父長的性格の終

焉をもたらすであろうし、権力のより相関的かつ日常的な性格への移行をはかりつつ、社会的なモビリティや外部世界との交流の増加を通して中国社会の閉鎖的・密教的性格を徐々に切開してゆくものと思われる。

このような歴史的蓋然性のなかで、「毛沢東思想」の絶対的護持を社会の発展の桎梏と感ずる社会集団が形成されてゆくであろう。こうして長期的には「非毛沢東化(De-Maoization)」は不可避免に思われるが、ここで問題は、すでに中国内部には、そのような社会集団の生成がみられることである。それはあたかも五〇年代中ごろのソ連社会において、インテリ、熟練労働者、テクノクラート、ビュロクラートなどの新しい社会的諸集団の成熟がスターリン神話を社会発展の桎梏と化し、スターリン批判を内部から必要としたように、昨夏の杭州事件(買上げ要求の都市労働者によるストライキ事件)以来、今春の天安門事件

にいたる中国社会内部の変動は、これらの動きを支えた潜在的な政治集団「走資派」の顕在化とともに、いまや中国にも、インテリ、熟練労働者、テクノクラート、ビュロクラートなどの広範な社会的成長があることを物語っており、彼らはいずれも「走資派」の基盤として、いわゆる「四つの現代化(工業、農業、国防、科学技術の現代化)」という「周恩来路線」を支持した新たな受益者集団であったように思われる(なお、前記「告ぐる書」は、周恩来が過般の全国人民代表大会で提起し、同大会で承認された中国の近い将来の国内建設のプログラムであるはずの「四つの現代化」には一言も触れていない)。このような広範な潜在的基盤のうえに、鄧小平は大胆不敵にもいわゆる「白猫、黒猫」論をぶちあげたばかりか、「全党全国の各項工作の総綱について」、「科学院工作のいくつかの問題について」、「工業発展を速めることについての若干の問題(二〇カ条)」とい

う具体的な政策プランをもって毛沢東政治に挑戦したのであった。去る八月の青岩署名論文「鄧小平批判の闘争を通じて団結を強化しよう」(「紅旗」第八号)は、天安門事件には、多数のインテリとともに下放知識青年や高級中学(高校)の学生、高級幹部の子弟など若い世代が加わっていたことを指摘しており、また、八月二三日付「人民日報」社論「鄧小平批判の急所を深くつかもう」は、鄧小平失脚にもかかわらず「批判」運動こそ当面の最大の課題だとして、鄧小平批判の新たな高揚を鼓吹しているが、これらの指摘は、毛沢東政治を奉ずる中国社会の基底に広範な「拒否権集団」が依然として存在することを示唆している。このような現実の諸発展のなかでは、「非毛沢東化」はある意味で不可避免な社会的要請だとも思われる。しかも、過般の河北大地震は「人が天に勝つ(人定勝天)」という毛沢東型社会主義建設の思わぬ陥

再編過程には、た国際麻薬市場とCIA……伊達宗嗣(特集・ネオファシズムと危機管理の構図)〈対談〉田中逮捕と動き出したネオファシズム 山川曉夫・水沢透 体制危機と危機管理の構図……高木郁朗 保守体制最後の切札 小選挙区制 星野安三郎 国家の論理に秘められた危機管理の諸相……江田操 米・中・ソを手玉にとる統一ベトナム……糸賀滋 〈暗躍する外資〉全容を現わすP&G戦略

〈特集〉安定成長下の貿易政策
 プラント輸出と貿易立国 日本 の将来
 森山信吾・山口衛一・石黒規一・田中洋之助
 日本経済の花 プラント輸出を占む……大塚茂
 プラント輸出の先兵 商社の苦悩……編集部
 日本の思案家とその足跡(宮崎浩夫)しませきよし
 薩摩藩の大逆臣 西郷隆盛の思想と生涯 坂元盛秋
 巨人列伝 堤清二(西武王国の異端児)が挫折するとき

〈連載〉マンモス集団を斬る
 第三の火のコンテンサー 東京電力③
 連載回顧録 戦後農林政策史(片柳真吉)林秀典

月刊 日本

10月号 ¥300(〒45)

連載・小説サントリアー 疑惑の系譜(50億円脱税事件)

連載・小説サントリアー 疑惑の系譜(50億円脱税事件)

政策時報社

107 東京都港区赤坂6-19-4 ☎(585)3977

毛沢東選集

完訳決定版

- 第1巻 第一次・第二次国内革命戦争の時期 1926—1937
- 第2巻 抗日戦争の時期(上) 1937—1941
- 第3巻 抗日戦争の時期(下) 1941—1945
- 第4巻 第三次国内革命戦争の時期 1945—1949

全4巻

北京・外文出版社
B6判・各五〇〇円
送料二八〇円

毛沢東著作選

★重要論文集 650円
1926—1963 送料200円

毛主席語録

★完訳ポケット版 200円
送料120円

毛沢東軍事論文選

★持久戦論等30篇収録
500円 送料200円

発売

東京・千代田・神保町3-17

株式会社 満江紅

振替東京1-109974 ☎03(265)9801

てしまったとも思われるだけに、「非毛沢東化」の課題は、やはり、大きな政治

的摩擦を伴う将来の重要課題になり得るよう思われてならない。

4 毛なき中国の外交

毛沢東の生命は、単に中国社会の内部だけではなく、国際社会全体の照準でもあった。注目を集めた米CIA中国分析官ロジャー・グリーン・ブラウンの「毛沢東存命中に米中正常化を」との論文(中国の政治とアメリカの政策——三角関係の再検討——「フォリン・ポリシー」誌一九七六年六月六日号)を挙げるまでもなく、米中国交樹立のスケジュールを毛沢東の生命との相関関係のなかで考えようとする見方はアメリカに根強かつたし、現に、米中正常化の問題は、すでに一般論の域を越えて、米台防衛条約廃棄の方法、台湾政権の核を含む自助防衛努力への措置、中国側の対台湾姿勢の最近の硬化に対する対応方法など、きわめて微妙な段階にさしかかっていた。

一方、ソ連の側が毛沢東以後の中国に對して寄せている期待と願望も、単に中ソ関係の改善という一般論においてはなく、ソ連の对中国包圍網の形成と再編の過程のなかに軍事・外交戦略的にビルトインされていたのである。私は去る二月、モスクワでソ連の对中国政策決定過程の責任者であるM・S・カービツァ・ソ連外務省極東第一部長(モスクワ大学教授)と一夜話し合ったとき、ソ連が進めている太平洋戦略のなかで重要な位置を占めるはずの台湾ないしは台湾海峡に對しても、毛以後の中国への期待が持続する限り、ソ連は慎重にならざるを得ない旨の方針を聴取し、私は道に、そのよ

うなソ連の期待が裏切られ、一方、台湾が米中正常化の犠牲の羊にされて、アメリカの糸を離れたのちの東アジアの国際関係の不気味な流動化を思わず心に描かざるを得なかった。

そこでまず米中関係についてだが、毛沢東の死によって、周恩来、鄧小平といずれもアメリカ側が膝を詰めて話し合ったリーダーをすべて欠くことになったアメリカ側の不安は、最近の米中交渉の停滞のなかでさらに強まるであろうし、アメリカは中国の権力構造の再編過程を当面じっと注視せざるを得ないであろう。最終決断者を欠いた中国側にも、アメリカとの具体的な交渉をこれ以上進めるだけの用意は当面ないであろう。

一方、中ソ関係についても、当面、急激な変化の手がかりはない。もっとも強硬な反ソ主義者・毛沢東の死は、中ソ関係改善への大きな出発点ではあり得ても、そのプロセス自体が発展するという保証はない。フルシチョフ失脚時に急遽、周恩来がモスクワに飛んで後継リーダーたちを打診したときのように、いま

モスクワからソ連の首脳が急ぎ北京を訪れるような契機はないのである。ソ連としては、あくまでも中国内政の流動化がもたらすリバーカッションを手がかりにする以外には方法がないであろう。

ところで、一般に中ソ冷戦とも思われる今日の中ソ対立の将来を考えるには、さしあたり、中ソ対立の構造的性格を認識し、それを方法的に整理しておかねばならない。今日の中ソ対立は、●民族的対立ないしはナショナルリズムの相克——Nation-to-Nation Conflict、●国家的対立ないしは国家エゴイズムの対立——State-to-State Conflict、③イデオロギー的対立ないしは教義上の異端者同士の対立——Party-to-Party Conflict、④政府間の対立ないしは外交上の対立——Government-to-Government Conflict、と5つ四つのレベルの対立構造が重層的に一体化しているところにその深刻な断面があるといえよう。

従って、論理的に問題を考えるなら、

統一評論

朝鮮の自主統一めざす月刊総合誌！

10月号（発売中）三八〇円

板門店事件をめぐる記者座談会
板門店事件をめぐる日本新聞論議の責任 鈴木 賢

1人当りGNP 1,284ドルの幻想 康 行 祐
金芝河の文学的評価をめぐる 下 宰 洙

対朝鮮・日本よもやま話 許 南 麒
談 多々良純

——特集 韓日癒着を剥く——
韓日癒着究明のために 李 教 舜
暗躍する日本自衛隊調査隊 吉原公一郎
日韓の軍事癒着と進軍一体化 前田鉄男
座談会・韓日癒着の黒い人脈を抉る
山川 暁夫 韓 桂 玉
荒井 荒雄 津 村 喬

よいどれ独裁者の半生 林 淳一

韓国問題緊急国際会議 伊 伊 桑・他
●筆苑・新井宝雄/宮原昭夫/全致学/他
●長篇小説 試練の中で 伊世重

*購読ご希望の方で書店で買えない方は、380円と郵送料(45円)を同封のうえ(切手可)下記へお申し込み下さい。

統一評論社

東京都千代田区外神田5-2-2(〒101)
電話03(834)4061・振替東京2-65085

民族的対立としての中ソ関係は半永久的に和解しがたいように思われ、国家的対立としての中ソ関係も遠い将来、中ソ両国の社会的・政治的・経済的落差が解消されでもしない限り和解しがたいけれども、イデオロギー対立に起因する党と党との関係は、リーダーシップが変わり、政策が変われば大きく動く可能性があり、政府間の関係ないしは外交上の関係には、国際関係の推移や内政のインパクトによってつねに変化の可能性が存在するといえよう。このように考えたとき、毛沢東の死によって右の③のレベルの関係までは改善される可能性が一応出てきたといえよう。

ソ連としては、やがて④の外交関係の改善から③の党関係の改善へとならぬかのステップを打つてであろうし、中国内部でもとくに軍は対ソ関係のこれ以上の悪化を避けようとするであろうし、関係改善への手がかりを探るかもしれない。だが、当面、この対ソ関係に関しては、毛沢東の現代修正主義批判・反覇権主義の立場からの偏向や逸脱への警戒心の方が先に立って、中国側は政策の変化に対してはきわめて保守的にならざるを得ないのではなからうか。

むしろ、中国の対ソ政策の変化は、直接的にソ連に対して生ずるのではなく、いわゆる「第三世界」外交のなかで迂回的・間接的に現れてくるかもしれない。毛沢東死去の直前、八月二十五日付『人民日報』社説「帝国主義、植民地主義、覇権主義に反対する闘争のなかで前進しよう——第五回非同盟諸国・政府首脳会議の勝利の開幕を祝って」は、「中国は広範な非同盟諸国とともに第三世界に属する」と繰り返していた。だが、去る八月中旬のコロンボ非同盟首脳会議での「中国の影」の薄さをふりかえるまでもなく、すでに「第三世界」の側は、中国が繰り返す原則的かつ抽象的な「第三世界」論には、いささか食傷しているようである。同時に、アンゴラ内戦での中国の立場（結果的には対ソ抗争のあまりアメリカと同じ立場でアンゴラ解放人民運動MPLAに敵対した）、インド洋上のディエゴ・ガルシア島における米軍基地建設に対する中国の黙認、チリのピノチエト軍事政権に対する中国の親和的な態度、ハノイと北京との冷たい関係（その象徴としての西沙群島、南沙群島の領土紛争）、中東産油国に対する産油国中国の立場からの支持（非産油国「第三世界」の中国への反発）などに起因して、中国の「第三世界」外交がこのところ大きく停滞している今日、「反帝だけではなく反社帝、反覇権主義の立場に立たねばならない」という毛沢東の強い要請の無理

が、まずはじめに手直しされざるを得ないのではないだろうか。だがここで最後に注目すべき問題点は、すでに六月中旬から毛主席の病状が悪化し、この九月二日には決定的な事態に至っていたといわれる状況のなかで、かなり周到な準備のうちに発表されたと思われる前記「告ぐる書」は、その最後の部分の今後の外交戦略を列記した部分で、「帝国主義、社会帝国主義、現代修正主義に反対する闘争を最後まで進めなければならぬ」とだけ述べて、具体的にソ連やアメリカを名指さず、久々に「米ソ等距離」に戻っていることである。「中国人民のすべての勝利はみな、毛主席の指導のもとに得られたものである」との「告ぐる書」の表現の逆説的解釈が可能であるように、あるいは後継のリーダーたちは、ここまですべてが毛沢東時代だという一区切りをいま一挙に画そうとしてゐるのかもしれない。

(なかじま みねお・東京外国語大学助教授)

報道
解説
評論

朝日ジャーナル

1976
Vol.18
No.39 240P
9・24

◆増大号◆

ロッキード疑獄特集

“永田町台風”の果てに 編集部

特集 毛沢東＝人・思想・革命

中国はどこへ行く 関 寛治／野村浩一／森 恭三

その巨大な人間像 竹内 実

解体する毛沢東体制 中嶋嶺雄

宇野重昭／江馬 亮／北沢洋子／陳 舜臣／矢吹 晋

